

《2012年8月 月例会報告》

【日時】2012年8月27日（月） 19:10～21:10（その後「ルン」～0:20頃）

【会場】筑波大学附属高校 3F 会議室（東京都文京区大塚 1-9-1）

【テーマ：情報提供者】

1) 1960～80年代の中国スポーツ：牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）

2) スタジアムから見る中国サッカーの現在地：宇都宮徹壺（写真家・ノンフィクションライター）

【参加者（会員）16名】秋元大輔（サッカーライター）、阿部博一（日本サッカー史研究会）、安藤裕一（筑波大ハンドボール部OB）、牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）、宇都宮徹壺（写真家・ノンフィクションライター）、屋繁男（評論・エッセイ）、金子正彦（会社員）、菊池悟（編集者）、北原由（青梅FC／都立武蔵高校）、小池靖（ビバ！サッカー研究会）、笹原勉（日揮）、嶋崎雅規（帝京高校）、竹中茂雄（FC品川）、中塚義実（筑波大学附属高校）、村山勉（Jリーグ競技運営部）、横尾智治（筑波大学付属駒場）

【参加者（未会員）5名】屋恵子、★木村哲也（筑波大学付属駒場サッカー部コーチ）、国島栄市（ビバ！サッカー研究会）、中嶋信夫（日経BPアド・パートナーズ）、★久篠祐介（立教大学）、

【報告書作成者】高田勝敏

注1）★は初参加のため参加費無料

注2）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

1960～80年代の中国スポーツ

牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）

スタジアムから見る中国サッカーの現在地

宇都宮徹壺（写真家・ノンフィクションライター）

<目次>

第I部 プレゼンテーション

1. 1960～80年代の中国スポーツ

牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）

2. スタジアムから見る中国サッカーの現在地

宇都宮徹壺（写真家・ノンフィクションライター）

第II部 ディスカッション

第 I 部 プレゼンテーション

1. 1960～80 年代の中国スポーツ

牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）

1) はじめに

今日は宇都宮さんが主役なのですか、宇都宮さんは先月の笹原さんに引き続き、現在の中国のスポーツについて話されるということなので、現在を理解するために歴史的背景を知っておいたほうが皆さんにとって良いだろうと思いましたが、前座に立候補させていただきました。

お配りした資料（レジメ）は表裏の1枚2ページになっています。60年代から80年代まで全てを話すことは、難しいので主に60年代について話をしたいと思います。

この時代1960年代から80年代は中国という国がめまぐるしく動いた時期であり、それにともないスポーツもめまぐるしく事情が変わりました。大まかに言うと1960年代は中国そのものが孤立していた時代、もちろんスポーツも孤立していました。1970年代の中国は国際社会に参入しようとし、さまざまな努力をした時代でありました。スポーツはその道具として利用され、またスポーツ自体も国際社会に入っていく為に努力をしました。1980年代に中国は完全に国際社会に進出し、オリンピックにも参加できるようになりました。1990年代になるとレベルも上がっていき世界のスポーツの中でもトップレベルになるようになりました。そして現在は資本主義が組み込まれ、また様子が非常に変わって来ています。私は孤立から国際社会参入への時代について話したいと思っています。

2) 孤立から国際舞台へ

1960年代の中国は国連に加盟しておらず、日本を含む多くの国は中国と国交がありませんでした。スポーツでもIOC(国際オリンピック委員会)に加盟しておらず、オリンピックには出場できませんでした。またFIFA(国際サッカー連盟)のような国際競技団体にも加盟しておらず、そのために本来はスポーツの国際交流はできない時代でした。つまり、いろいろな面で孤立していたということです。

FIFAでは、加盟していない国と試合をすることを禁止しています。この規則は現在もあって、非加盟国と交流をするとFIFAから除名されます。これはFIFAという組織を守るために制定されています。ほかの多くの国際競技団体も同じです。

しかし中国は他の場合と事情が異なっており、厳密にこの規則が適用されたわけではありませんでした。なぜ、中国が国連にもIOCにもFIFAのような競技連盟にも加盟していなかったかという点、内戦に敗れて台湾に逃げ込んでいた国民党の政権が、中国全体の代表と称して加盟していたからでした。実際には中華人民共和国が、すでに国土のほとんどを支配しているわけであり、台湾を国全体の代表とするには無理がある。そういった事情もあり、1957年に日本代表が高橋英辰監督のもとで中国遠征を行って

も処罰されることはありませんでした。ただ、相手は単独チームないしは、省のチームでナショナルチーム同士の試合は行われませんでした。

3) 世界卓球北京大会

そういったことを背景に、その当時の中国がどうだったかを話したいと思います。

交流が出来ませんでしたので、当時は日本の新聞記者も中国には入れませんでした。私が初めて中国に入ったのは1961年に北京で世界卓球選手権が開かれた時でした。その当時、北京駐在の日本の新聞記者は日本共産党の「赤旗」の記者が1人だけでした。そういった時代ですから、新聞社にとっては中国に入ることも非常に貴重でした。

国際卓球連盟は参加国全部のメディアに取材させることを条件に北京で世界選手権大会を開催することを認め、中国もそれを受け入れました。それで日本の記者も取材のために中国に入ることができました。

しかし、取材登録のための案内には「日本人のジャーナリストの入国は認めるが、体育館の記者席のキャパシティに限りがあるために優先順位を設定する。第1はスポーツ新聞の記者、第2は一般の新聞のスポーツ記者、第3はその他の記者とする」とありました。

読売新聞としては中国の内情を知りたいので、本来は中国語を話せて中国の事情に詳しい外報部の記者を行かせたい。しかし、そう申請すると優先順位を口実にはねられてしまう可能性がある。迷った末に運動部から記者を派遣することになりました。当時、私は読売新聞で一番若い記者で日本体育協会を担当していました。当時、同じく体協を担当する先輩がいましたが、2月にスキーの取材で骨折してしまい、私がカメラマンをといっしょに急遽中国に行くことになりました。そこから、中国のスポーツと関係するようになり、交流困難だった時代から、読売新聞記者として、何度も中国のスポーツを取材する機会に恵まれました。

どんなことをしたかは、書ききれないのですが資料に、主なものを5つ書いてあります。

資料：牛木の日中スポーツ交流取材（主なもの）

①北京世界卓球選手権大会取材(1961年)
②ピンポン外交取材(1971年)
③習志野サッカーの訪中同行(北朝鮮訪問の帰途)(1972年)
④日中スポーツ記者交流企画実行(1982年～83年)
⑤三国友好登山企画取材(1988年)

①と②はたまたま取材できたものですが、③④⑤は自分で企画したプロジェクトで、チームを連れて行ったりして取材したものです。

なぜ、北京で世界卓球選手権が行われたかという、その当時ほとんどのスポーツでは台湾が国際連盟に加盟していたのに対して、卓球だけは中国を加盟させていたからです。つまり、中国が世界選手権

を開催しようと思ったら卓球しか開催できない時代でした。

もう一つは、中国政府に、世界選手権を行うことで国際社会に進出する、つまり台湾と入れ替わるための足がかりにしたい思惑がありました。東京オリンピックで日本が復興を世界に示したように、世界選手権で中華人民共和国が国内をうまく統制していることをアピールする目的があったというわけです。これを考えたのはおそらく周恩来だと思います。というのも、世界選手権の開催自体は毛沢東が許可したわけですが、彼は3000万人が餓死する結果となった大躍進政策の失敗、1960年まで3年続いた災害の責任を取り、国家主席を退いていました。当時、ナンバー2であった、周恩来が大会開催を推進し、日本人記者の取材も認められたという事情がありました。

新聞社としては、中国入りできたわれわれに、スポーツ以外の中国国内の様子を伝えることを期待していたわけですが、運動部の記者ですから、まずはスポーツの取材をしました。まずは卓球取材をし、その後中国のチームが、親善試合の為に各地に遠征をする際についてゆき、当時は人民公社と呼ばれていた農村を、また上海のような大都市を取材し、その当時のスポーツに関して少ないにしても、非常に貴重な情報を仕入れることができました。

4) 中国の体育政策

その当時の情報については資料に書いてあります。

資料：当時の中国の体育政策

「発展体育運動、増強人民体質」（「東亜病夫」をなくす）
農村（人民公社）にコンクリート製の卓球台があった(戸外)
バスケットボールのコート（戸外）は各地にあった

「発展体育運動、増強人民体質」は当時のスローガンで、至る所に書いてありました。「体育運動を発展させて、人民の体質を強くしようということです。」当時聞いた説明によると、強い兵隊を作るために体を鍛えるというのではなく、本当に人民の健康のために運動をしようという趣旨である、ということでした。何故かというと、中国人は「東亜病夫（東アジアの病気の男）」であるという言葉があり、それをなくすためだということでした。たとえば、暑い広東のゴミゴミした街角の家の入り口でしゃがみ込んでいて、一日何もせずにボーっとしている、あるいはアヘンを吸っているというイメージ。これが中国人の典型であると見られている。これでは新しい国は作れないので、体育を盛んにして人民の体質を改善しようということでした。

実際にスポーツが盛んに行われていたかということ、当時中国は大変貧しいので、いろいろな競技スポーツは出来ない状況である一方、卓球は国際社会で唯一認められているスポーツですし簡便であるということで、中国全土に奨励しました。我々が農村を取材した際にも屋外にコンクリートではありましたが、正規の大きさの卓球台があり、卓球を盛んにして人民にスポーツをさせようという政策の一端を垣間みることができました。バスケットボールのコートも屋外ですか各地にありました。当時は日本でも

バスケットコートが屋外にあることが多かったのです。当時の中国は、スポーツが盛んだとは言えないかもしれませんが、スポーツを奨励する政策は明らかにあったということが出来ると思います。

それから、もう一つ私が見て当時感心したのは业余体育学校というシステムでした。业余というのは「アマチュア」という意味だということでしたが、私の見たところでは「本来の仕事の余暇」という意味のほうがピッタリでした。例えば、日本でいう小学校や中学校では授業の後に部活を行います、中国では子供は授業の後にそれぞれの业余学校、例えばサッカーはサッカーの业余学校、卓球は卓球の业余学校に行きスポーツをする。ある学校は授業が終わると卓球の业余学校になり、その学校の生徒でも卓球以外は他の学校へ行きスポーツをする。学校施設を利用した子供たちの育成クラブのようなものになります。スポーツに限らず、他の文芸や踊りと言ったものの业余学校もありました。体操や水泳といった個人競技においては英才教育手段として成果を上げ、後に国際大会に進出できるようになった時の選手育成期間となりました。なぜならば良い選手を一カ所に集める事が出来るからです。しかし中央に集めるのではなく、上海なら上海、一つの省なら省で集めるので競争原理も働きます。クラブ制度で英才教育が出来るという非常にいい制度で、将来日本もこうすべきではないかと感じました。その後、私は、日本でクラブスポーツのキャンペーンを張ったりしましたが、そのアイデアのものは业余学校です。

その後北朝鮮に行った時には、同じような「少年宮」があるのを見ました。どちらもソ連の「ピオニール」にならって始められたものかもしれません。

5) 日中スポーツ記者交流

後に日中スポーツ記者交流企画し中国からスポーツ記者5名を招いた時に、(中国にとっても貴重な機会だったので、必ずしもスポーツ記者でない記者もいましたが) 国民体育大会が行われた松江など、いろいろな場所へ5人を連れていきました。島根県から大阪へ行って次に広島へ行く旅行計画を私が立てていたところ、5人が「地図をみると、松江からまっすぐ広島に行けるが、その経路に変更できないか」と言ってきました。私はもちろん行けるが列車は特急ではないし、乗り心地も良くないと彼らに説明をしました。しかし、彼らは「中国地方を縦断して広島へ出たい」と主張しました。そこで松江から広島に出るルートに変更しました。彼らは私が、日本の良い所ばかりを見せているのではないかと疑っていたのです。そして農村ばかりのルートを行けば、日本の貧しいところを見ることができるだろうと考えたのです。列車が広島に着こうかという時に、彼らは私の所に来て話を聞きたいと言うのです。「日本は資本主義で搾取されていて農村は疲弊していると聞いていたが、列車から見ると農村のほうが立派な家に住んでいるではないか」と言うので、私は「日本でお金がないのは、我々都会の新聞記者で、農村は豊かなんだ」と冗談交じりに説明をしました。お互いに、そういう程度の認識だった時代です。

中国との交流は“いってこい”なので、今度は彼らが私を招かなくてはならない。それで翌年私を中国に招待しました。その年に上海で中国の全国体育大会が行われたので、それを見て来ました。これはオリンピックの前年に予選会のような形で行われています。この大会は日本の国体同様、各省対抗なのです。開会式では、各省と上海や北京のような特別市、それに八一（パーイル）と呼ばれる人民解放軍

の組織（こちらは全国組織）が、それぞれ入場行進をします。これを見ていて、明らかに省ごとに体格も違えば、歩き方も違うのが分かりました。例えば福建省はバレーボールが強いだとか、この省はこれが強いだとかを通訳が説明するのです。それを聞き、なるほど中国は一つの国だと思ったら間違いで、中国はいろいろな国の集まりのようなものだと、特にスポーツに関してはそう思いました。

6) 中国のサッカー

当時サッカーは中国では比較的盛んなスポーツでしたが、全国選抜を作ってもなかなか勝てない。当時、中国のサッカーには4つの流儀があると言われていました。

1つは東北（遼寧省）。これは朝鮮族で粘り強く、よく動く。我々がイメージする朝鮮のサッカーです。

次に北京・青島(チンタオ)などの北中国のサッカー。ここは主として青島あるいは天津といった国際都市にサッカーが入ってきたところからはじまっています。青島は第1次世界大戦までドイツの植民地として、ドイツの植民地時代にサッカーが行われていたのは明らかです。青島で日本軍の捕虜になったドイツ兵が広島の似島の捕虜収容所に入り、広島にサッカーを伝えて広島のサッカーのレベルが上がった事実もあります。当時青島周辺でイギリス流だけない、いろいろなサッカーが紹介されたのは確かで、そういった意味では割とヨーロッパ的なサッカーであると言われていました。

第3に上海です。上海は国際都市で、戦前は、租界と呼ばれる街の中での植民地のような土地があり、租界の中ではほぼ自分の国のように生活していた人々がサッカーをやっていました。その影響で上海のサッカーは国際的な技術と戦術のバランスのとれたサッカーだということでした。

最後に南部の広東です。英国の影響が非常に強かった地域ですが、今我々が思い浮かべる英国のキックアンドラッシュのサッカーとは異なり、足技のサッカーです。最近でもインドネシア、マレーシア、タイなどで大衆が楽しんでいるのは足技にこだわるサッカーですが、その系統です。体は小さい、弱い、しかしボール扱いはうまい。ただし自分1人でやるといったサッカーです。

この様な4つの種類をまぜこぜにして選手を集めても強いナショナルチームは出来ない。体操や水泳のような個人競技とは違うというのが、当時私の感じたことです。

7) ピンポン外交

その後、1971年に名古屋で世界卓球大会が開かれていた時に、中国がアメリカチームを招待するという爆弾的なニュースがありました。これは共同通信の特種で、当時、読売新聞の記者として名古屋で取材していた私たちは完全に抜かれて、苦い思いをしました。共同のニュースをAP通信が転電し、読売新聞は、それを夕刊のトップに1行だけ、やっと間に合わせて載せました。

この時、中国には卓球を足がかりに国際社会で権利を回復しようという明らかな目論見があり、この時のスローガンは“友好第一勝負第二”でした。これを機に中国が国際進出を始め、それと前後して台湾と入れ替わり国連に加盟する、FIFAにも台湾と入れ替わりF加盟するということが行われました。70年代には国際的な組織での地位は、はほとんど台湾と入れ替わっていました。

それから、これは別に話す機会があればいいのですが、1988年にエベレストの登山を中国登山協会の発案で行いました。これは、世界最高峰のエベレスト（中国の呼称はチョモランマ、ネパールの呼称はサガルマタ）を日本、中国、ネパールの合同登山隊で、チベット側とネパール側の両方から同時に登頂し、それぞれ山頂（国境）を越えて反対側に下山する、それをテレビで生中継する、という大掛かりな企画でした。

中国登山協会は、これを1988年の5月に行いたいと言ってきました。5月はプレモンスーンで一番気候がよく、成功しやすい。つまり絶対に成功する時期に行いたい。夏にはソウルオリンピックがあり、その前に登山を成功させたいということでした。

というのは、このころには、中国でもオリンピックがスポーツの中心となっており、オリンピックで勝った競技団体は地位が上がる、金メダルを取ると年金が出るといった状況になっている。オリンピック競技ではない登山協会としては、オリンピックの前に金メダルに匹敵するような新しく目覚ましい業績が欲しいということでした。

この登山は、天気にも恵まれ、奇跡的な大成功でした。つまり88年の時点では、中国は完全に国際的な視点で仕事をしようとしていた時代でした。

そして90年代は完全に、国際スポーツ界で主要な地位を占めるようになり、さらに、2000年代にはプロ卓球、プロサッカーなどが導入され、新しい時代に入ったと言えることでしょう。

ここまで大雑把な話ですが、宇都宮さんのお話の前提として頭に入れていただくと良いと思います。どうもありがとうございました。

2. スタジアムから見る中国サッカーの現在地

宇都宮徹壺（写真家・ノンフィクションライター）

本日の発表は、先日上智大学のコミュニティー・カレッジで発表した内容をサロン用に少し修正したものです。タイトルは同じで、「スタジアムから見る中国サッカーの現在」です。日本ではサッカー蹴る球、「蹴球」と書きますが、中国では文字通りフットボール、サッカーです。今年4月に現地に行き、カメラに収めた写真ないしはインタビュー取材で得た情報を、本日は写真を中心に発表したいと思います。

まずは中国サッカーと聞いて何をイメージするかを皆さんにお聞きしたいと思います。中塚先生、何が思い浮かびますか。

中 塚：ちょっと偏っているかもしれませんが、中村覚之助。

宇都宮：え？

中 塚：（サッカーを本格的に日本に導入した東京高等師範の）中村覚之助が中国の済南師範に赴任した時の話が浮かびます。

宇都宮：だいぶ昔の話ですね。

中 塚：ものすごい昔の話です。今、中国サッカーと東京高等師範に関係があったんじゃないかと考えていまして、ちょうどその話が頭の中に出てきました。

宇都宮：村山さん、どうでしょう。

村 山：ラフプレーですかね。

宇都宮：そうなりますよね。他にはどうでしょう。

参加者：八百長があると聞いています。

宇都宮：八百長。そうですね。他にもいろいろあるかと思いますが、いくつか挙げると、（写真を指しつつ？）特に抗日デモかと思間違えような愛国的なスタンドの応援。これは2004年のアジアカップの写真です。日本でもニュースになりましたが、ナショナリズムを前面に出した応援の光景で

すね。村山さんがおっしゃったラフプレーでは、これは2008年の東アジア選手権で中国の選手が安田選手に思いっきりカンフーキックをしている決定的なシーンです。

最近では上海申花にアネルカやドログバが加入し、やたらと景気がいい話だったり、また岡田武史前代表監督が杭州绿城で監督に就任したりという話題もありました。

先ほど話に出ました、反日的な応援やラフプレーや八百長。やたらと景気がいいというのはすなわちバブルなのではないのか言い換えることも出来るのかもしれませんが。岡田さんの挑戦は非常に画期的でもある反面、なぜ今まで中国で指導者ないしは選手としてやろうという人が出ていなかったのか、という疑問もあります。現代の日本では、政治・経済・文化全てにおいて、中国抜きには語れない、好む好まざるに関わらず我々はずっと中国と付き合いしていくという時代なのですが、なぜかサッカーに関しては人的交流が非常に少ないわけです。

例えばJリーグは今年20年目ですが、何人の中国人選手がプレーしたかご存知でしょうか。

中 塚：1人、賈秀全

宇都宮：賈秀全は有名ですよ。他にはどうでしょうか。

笹 原：3人。

宇都宮：後は誰でしょう。

笹 原：知りません（笑）。

宇都宮：実は2人です。賈秀全はあまりにも有名ですが、もう1人、リーグ戦の出場はなかったはずですが徐曉飛という選手が、コンサドーレ札幌で1年間だけプレーしています。私が彼と会ったのは2006年のこと、四国リーグのカマタマーレ讃岐で彼がプレーしていた時です。彼の場合は非常に特殊な例でして、四国のおそらく高松に留学していたお母さんに共に来日していて、日本で教育を受け高校大学と進みJリーガーとなりました。そういった意味では、純粋な直輸入ではないと言えます。これほどまでに多く韓国人選手がJリーグでプレーし、また韓国でも日本の選手がプレーをする状況下で、これまで中国人選手はたった2人しか存在せず、また中国のトップリーグで活躍した日本選手もこれまで巻と楽山の2人のみです。（藤吉は2部でプレー）現在トルシエが深圳紅鑽で監督をしていますが、このチームがトップリーグにいた時に先の2人がプレーしていた。それだけなんです。

今回なぜ中国への取材を思い立ったかといいますと、非常に景気がいいという話もありましたし、岡田さんがどのような仕事をしているかというのにも興味がありましたが、一番の疑問

点として、なぜ日中サッカー界はこれまですれ違いを続けてきたのか、という点がありました。我々には中国のニュースがたくさん入ってくるのですか、ことサッカーに関してはアネルカがプレーしている、ドログバが行くかもしれないといった類ばかりで、実際どのようなサッカーが行われているのか、リーグを取り巻く状況はどうか、はたまたサポーターの様子はどうかという情報はなかなか入ってきません。ACL という接点はありますが、ACL ではなぜかラフプレーばかりするというイメージしかないですし、中国代表に関しても同様のイメージを思い浮かびます。

今回の取材においては、中国サッカーの現状をできるだけフラットな視点で見てみようというのが目的でした。

まずは中国の地図からお見せしましょう。現在中国のトップリーグである中国スーパーリーグ、漢字では中国超級と書きますが、中国超級のチームは現状 16 チームあります。まずこれが 16 チームの名前で、昨年の順位に準じています。優勝したのは杭州恒大です。2 位は北京国安。聞いたことある名前がいくつかあると思います。

資料 中国スーパーリーグ 2012 参加チーム

1.広州恒大	2.北京国安	3.遼寧宏運	4.江蘇舜天
5.山東魯能	6.青島中能	7.長春亜泰	8.杭州緑城
9.陝西中建	10.天津泰達	11.上海申花	12.大連實徳
13.河南建業	14.上海申鑫	15.大連阿爾濱	16.広州富力

チーム名の特徴としては、地域名と企業名が入ることです。Jリーグでは企業名は禁止されていますが、中国では必ず企業名が入っており、スポンサーのメリットが重視されています。後で話題に上がると思いますが、クラブの身売りという話もよくよく起こります。場合によっては遠く離れたところにチームが移動するケースもあり、その場合サポーター心情は顧みられることなく、あくまでビジネスの世界の話になります。

各チームの場所はこのようになります。一見分散しているように見えて、やはり富が集まる沿岸部にチームが多いことがわかります。またアジアカップが行われた重慶は特別市に当たり人口が 3,000 万人程いるにも関わらず、1 部・2 部のチームが 1 つもチームもないなど、均等に別れているようで実際は偏っていることが、この地図から読み取ることが出来ます。

そこからさらに内陸部に行くとはほとんどチームがなく、去年タジキスタンに代表戦の取材に行く途中に新疆ウイグル自治区に入り質問したのですが、かつて 3 部のチームがあったが今はないと言っていました。

今回の3週間くらいの日程で、私が取材したのは4カ所です。まずは北京から入り、ACLの北京国安対FC東京の試合を見て、それから岡田監督が率いる杭州绿城がある浙江省へ飛行機で向かい、その後上海へ鉄道で移動し、最後に広東州の広州に飛行機で向かうという行程でした。

先ほど牛木さんから中国の歴史のお話がありましたが、中華人民共和国に限定して歴史を振り返りたいと思います。ちなみに周恩来が中国サッカー代表と握手しているこの写真は、中国サッカー協会の廊下に飾ってあった写真です。中華人民共和国の建国は1949年です。ネットで集めた情報によると初めて公式戦をしたのが1951年だそうです。この時は、資料を見る限りでは、東国金東、解放軍、河北中南、鉄路、済北、済南と地域の代表が参加しています。当時は交通網も限られていましたから、広い中国でホームアンドアウェー方式は当然実施できなかったもので、それぞれの地域の代表が1カ所にセントラル方式で集まり試合をし、会場を転々としていたようです。はっきりとしない情報なのですが、その後1952年には初の国際試合が行われたとのこと。調べてみますと中国サッカー協会が設立されたのが1955年ですので、一体どのようなかたちで試合が実施されたのか不明ですが、とにかくフィンランドと試合を行ったようです。

そして、ワールドカップがイングランドで開催された1966年に文化大革命が始まり、全てのリーグ戦が中止されました。牛木さんにお伺いしたいのですが、当時日本では文化大革命はどのように伝えられていたのでしょうか。

牛 木：文化大革命は今となっては中国共産党内部の権力争い、毛沢東が自身の復権の為に全国的規模で紅衛兵という子供たちまで利用して起こした暴力的な運動ということがわかっていますが、当時の日本の評論家達は意見が二分していました。一方は文革を賞賛し、また一方は批判するといった按配で、朝日新聞は文革に賛成し、読売新聞や他の新聞は批判をしていました。そして朝日新聞のみ中国に特派員の滞在を許されたというのが当時の状況でした。調べてみればわかると思いますが、文革の最中にスポーツをやるという雰囲気では全くありませんでした。

宇都宮：そのようですね。古い物を否定し、貴重な仏像や文化財が破壊された一方で、スポーツは反革命的でありエリートものであるとの風潮でとにかく全てのスポーツが否定されていたと、本を読んで理解しています。そういったわけで文革はいろいろな物を破壊してしまったと思います。当然、スポーツも文革によって大きなダメージを負いました。おそらく20年か30年後戻りしなくてはならない程のダメージだったと思います。リーグ戦は文革が段々収まってくる1973年から復活し、このころには国際社会を意識した動きも始まっており、1976年のカタールで行われたアジアカップでは初出場で3位となります。さらには1984年には準優勝とこの辺りから少なくともアジアでは力を伸ばしてきました。

そして日本から遅れること1年の1994年に国内リーグがプロ化されます。これに関しては当時をよく知る方に聞くと、「あれは急ぎすぎた」という話を耳にします。Jリーグの成功を目の当たりにし、日本と中国の経済状況からスタジアム環境やサッカー文化に非常に大きな違いがあるのにも関わらずあえて無視し、日本であれだけ盛り上がるならばこちらもやろうと、力任せに国内リーグを強化したのが1994年とのことです。2002年日韓ワールドカップに、リーグ戦全敗ではありましたが、中国は初出場を果たします。これが現在まで中国の唯一のワールドカップ出場です。2004年には日本が優勝したアジアカップを開催し、準優勝。私も決勝戦の現場にいましたが、大いに盛り上がった大会でした。そして2008年に北京オリンピックが開催され、中国は益々スポーツ大国になっていくのではないかと思った矢先の2009年から大規模な八百長事件が発覚してしまいます。これもものちほど話しますが、この八百長事件というのはこの時に初めて八百長が行われたのではなく、実は90年代からずっと続いていたことにやっとメスが入り、次々と遡っていくと協会の会長クラスまたはクラブのオーナー、さらに言えば審判、それも2002年に笛を吹いた審判が捕らえられ、八百長事件が連坐し断罪されるという非常に深刻な事件でして、この時から中国サッカーは非常にダーティなイメージが付きまとうこととなります。どうせサッカー八百長でそんな世界にうちの子供を入れるのはとんでもないと考える中流家庭が増えると言われていています。

それでは早速、現地で撮影された写真をお見せしたいと思います。

まずは北京です。これはACLの北京国安対FC東京の首都対決の前日の風景です。背景に見えるのが北京工人体育場でアジアカップの決勝が行われたスタジアムです。特に北京のような政治に近い街ですと、警察や軍隊が人数をかけてスタジアムを取り囲む風景が日常的で、この点はロシアやウクライナ、あとはセルビア辺りと全く一緒だなと思って見ていました。とは言え、このスタジアムに来たのはアジアカップ決勝以来でしたので、その当時の反日一色なイメージと比べると割とのんびりした風景が広がっていました。

これは試合当日のスタジアムの様子です。北京国安のチームカラーはグリーンなのですが、このグリーンのユニフォームを着た若者達が歩いて行く様子が見て取れると思います。サポーターを見ていると非常に若者が多いですね。最近Jリーグのゴール裏の年齢層が上がっているという話題がよく挙がりますが、中国の場合はいわゆるコアサポーターと呼ばれる人たちは高校生から20代半ばくらいだろうと見ています。非常に若いです。この女の子の格好見ると、特に北京だからかもしれませんが、サッカーを応援するというのかユースカルチャーのような雰囲気であると感じました。一方、洗濯物のようにユニフォームが掛かっていますが、これはすべて偽物です。中国は海外の商品のコピー商品がやたらと多いことが知られていますが、実は国内でもコピーが横行しています。今回同行してくれた人に、お土産にオフィシャルのユニ

フォームを買いたいと聞きましたが、「そんなものはない」と言われました。広州恒大のようにオフィシャルショップを持っているクラブもありますが、北京国安に関してはオフィシャルショップで公式商品を売るという発想がないようで、みんながここで安く購入していきます。そういうわけで緑が微妙に違ったりします。

中 塚：これ、全部同じチームのユニフォーム？

宇都宮：ええ、すべて北京国安のユニフォームです。これも試合当日の写真です。この試合をご覧になられた方いらっしゃいますか？

参加者：現地にいました。

宇都宮：スタジアムの雰囲気はどんな印象でしたか？

参加者：公安の方に囲まれて、北京のサポーターと大分離れていたの、威圧感は感じなかったですね。

宇都宮；ありがとうございます。まず私がスタジアムに行って驚いたのは、観客数の多さでした。日本だと ACL の特に予選リーグはミッドウィークの夜の開催で観客が少ないイメージがあると思いますが、ところが中国では ACL の方が人気があります。この日の入場者数は 31,256 人で、しかも前節のオーストリアのブリスベン・ローア戦では 41,000 人も入ったそうです。日本で ACL の予選リーグで 3 万や 4 万はちょっとあり得ない数字ですよ。1 万人いくかいかないかくらいの数字じゃないでしょうか。これが何故かと尋ねてみますと、今の中国にとって唯一世界に繋がっているのが ACL なのです。中国代表もアジア 3 次予選で敗退するなど全く結果が出ず、女子も最近ではオリンピックに出られない現状で、中国サッカーが世界目指すとなると ACL しかない。そういったわけで ACL はお客さんが多く、チケットもよく売れる、応援にも熱が入ると、日本とは全く違った光景が繰り広げられていました。これが FC 東京のサポーターです。ゴール裏のそれも電光掲示板の近く高いところに押し込められて、ひと固まりだけいました。この写真に写ってますか？

参加者：このちょっと左側でした。

宇都宮：FC 東京のサポーターは割と相手を揶揄するような横断幕を作るのが得意なのですが、そういったものは一切なく、日の丸もありませんでした。この場にいた J リーグの関係者から、そういったものに関する規制が入ったと聞きましたが、どうでしたか？

参加者：事前に日の丸等は持ち込めないというアナウンスがチームからあったので、持っていかなかった人や没収された人もいたかもしれません。実際に日の丸が没収されたかは分かりませんが、空港でも荷物検査が厳しく、私もトイレが汚いということでトイレットペーパーを持参しましたが、取り上げられました。

宇都宮：そういう訳で、声だけで一生懸命応援していたという印象でした。この試合は結果1対1でしたよね？

参加者：はい。

宇都宮：これは試合後の会見の様子ですが。このときポポヴィッチが大変怒っていました。とにかく相手のラフプレーが酷すぎるし、それに対してジャッジが全くされていない。我々はサッカーをしに来たのに、これは一体何だと怒っていました。この後に現地のジャーナリストと食事する機会がありまして北京国安の番記者に聞いたところ、ポルトガル人のパチャメ監督の下でプレーする北京国安は元々パスサッカーを重視するスタイルを持っているそうです。しかし相手がFC東京ということで、ロングボールと激しいコンタクトのスタイルに切り替えて、とにかく結果重視のサッカーをしたと言っていました。それからもう一つ面白かったのが、この後岡田監督に話を聞いた際にジャッジの基準について聞いてみたところ、岡田さん曰く「中国じゃあんなもんだよ。むしろあの審判はよく見ていたのではないかな」とおっしゃっていて、岡田さんは中国サッカーになれてきたのかなと思ったりもしましたが、私がおのとき感じたのは中国=ラフプレーというのは少し短絡的なかもしれないということで、いろいろな見方があるのかもしれない。あえてボディコンタクトを強くしてくるようなチームもあるし、ジャッジの水準にしても中国は高くもないけれども、そんなに低くもない。ジャッジに関してもう一つ言うと、今の中国の主審はみんな20代から30代前半と若いそうです。これは実は八百長事件と関係してしまっていて、ベテランの審判はみんなクビになったそうです。若い審判に無理矢理世代交代をして腐敗一掃を目指しているそうです。そのため自信のないジャッジがあることをあるようですが、岡田さん曰く、非常に礼儀正しくよくやっている。時々これは何だというジャッジもあるが、よく真面目にやっているという点で好感を持てると言っていました。

次の写真は、中国サッカー協会に行ってきました。御茶ノ水のビルに少し似ている雰囲気もありますが、ちゃんと見張りが立っている辺りがもう少し威圧感を感じる感じでした。この方が副会長の林曉華さんです。びっくりしたのが私と一つしか違わなく47歳。中国サッカー協会では協会は名誉職で実権は4人か5人の副会長が握っているようで、彼は副会長のなかでナン

バー2だそうです。もう一つ付け加えると、日本だとサッカー協会の会長はメディアに出ますが、中国ではほとんどメディアに出ることはないそうで、今回のように副会長が取材に応じてくれることは非常に稀とのことでした。それはおそらく日本から来たというのが関係しているのではないかと感じていました。といいますのも、中国サッカー協会としては、日本サッカーに学べということを意識しているそうです。どういうことかと言いますと日本で30年以上培われてきた育成システムがあったからこそ、いまのJリーグや日本代表の活躍があるのであって、限られた選手だけを鍛え上げるのではなく、時間はかかっても裾野を広くして指導者も育てないと中国サッカーは駄目になると、林副会長は言っていました。ちなみにジュニアとユースの登録者数がどれくらいか聞いてみたところ、75、870人とのことでした。日本の2種と3種の登録者数は2年前の数字で412、899人と桁が違っています。また後でグラスルーツの話が出てきますが、日本の10倍の人口がいる中国ですか登録者数、特に少年の登録者数はものすごく少ない、そしてクラブはもっと少ない。底辺の小ささ、これが中国サッカーの低迷につながっているわけです。

なぜ、サッカーをやる子供が少ないのかと質問をしたところ、即答でした。一人っ子政策の影響だそうです。一人っ子政策によって、子供をサッカー選手にしようという親が非常に少なくなった、これに尽きると言っていました。

この林さん、元々はオリンピック等の組織に所属されていた方だそうで、何度も来日されていてJFAにも行ったことがあるそうです。リップサービスもあるかもしれませんが、中国サッカー界のトップが日本サッカーをリスペクトし日本から学ぼうという姿勢が、このインタビューからよくわかりました。

次に場所が変わりまして、杭州です。こちらは西湖、世界遺産にも登録されています。岡田さんか率いる杭州绿城はそんなに大きなクラブではないと思っていたのですが、ホームスタジアムの杭州黄龙体育中心は終了人数が51、800人と、とにかく大きい建物でプレスの入り口を探すのに時間がかかりました。こちらがサポーター、杭州のチームカラーもグリーンです。岡田さんの現地での評価がどのようなものかというのは、皆さん気になると思いますが、非常にリスペクトされています。岡田さんも初めて中国で仕事をするということで、まなじりを決して中国に行かれたそうですか、みんな自分をリスペクトし信じてくれる。こちらがリクエストしたのは何でも答えてくれる、サポーターも負けが込んでいても「だから日本人の指導者はダメなんだ」といった感じではなく、「次がある、頑張れ」といつてくれるくらいに優しい。監督はたたかれるのが仕事だと思っていたが、こんなに優しい人たちに初めて会ったとおっしゃっていました。一時期、杭州绿城が最下位に沈んだ時があったのですが、中国版ツイッター”微博(ウェイボー)”上では、「岡田監督絶対にやめないで下さい」、「岡田さんにもっと時

間をあげて下さい」、「たとえ降格しても岡田さんについていきます」といったサポーターの書き込みがあったそうです。このように岡田さんが現地で期待された、リスペクトされているのが分かると思います。

この日の対戦相手はアネルカの上海申花だったのですが、中国超級では試合前に国歌斉唱が行われます。中国国旗が掲揚され、それに向かって国歌が流れます。これまで私はいろんな国のリーグを見てきましたが、私が知る限り、リーグ戦で国歌を流すのはトルコ、タイ、アメリカそして中国の4ヶ国のみです。試合展開は、チーム戦力は上海申花が圧倒的に上でアネルカが試合開始直後にゴールを決めてしまいました。後にも出てきますが、杭州绿城は外国人にお金をかけず、自前で選手を育成しようという中国では珍しいタイプのクラブでして、それに何名かのJリーグ経験者がいるといった布陣です。後ろに移っているのはフロンターレにいたレナチーニョです。この手前に移っている選手、何人だか分かります？この選手は巴力（バーリー）という名前で、実はウイグル族の出身で中国代表選手です。牛木さんが先ほどおっしゃっていましたが、中国は一つの国のようで、それぞれの地域で文化も違うし、民族も違うと話をされていましたが、まさにおっしゃるとおりで少数民族の中から中国代表になる選手がいることは非常に新鮮でした。やはり中国とは多民族国家であると改めて感じました。岡田さんのこの日の采配は、80分まで1人も交代をせず残り10分で2人選手を投入しました。なぜこのような采配をしたのかと聞くと、この試合は主力選手が怪我とサスペンションで出場できず、ベンチで使えるのもこの若い2人だけであった。彼らはトップリーグでの出場経験がないので、2人を使えたのはあのタイミングはだけであったと、おっしゃっていました。1対1の攻防の中で2人を切り札として出したのですが勝つことは出来ず1対1で試合終了してしまいました。

こちらは上海申花の監督、俗にいうフランス4銃士の一人、ジャン・ティガナです。ティガナは、この当時おそらく最高額の300万ユーロで三顧の礼をもって迎えられましたが、この試合がティガナ監督の上海での最後の試合となりました。この試合も非常に厳しい試合でしたが、当時、上海申花は11位か12位で、ティガナを呼んでアネルカ獲得したのにも関わらず、なかなか順位が上がらないというジレンマを抱えていました。そして今度は格下と思われていた杭州にも勝ちきれずに引き分けてしまいました。岡田さんは非常に悔しそうで、やれる事は全てやったが、勝てなかったのは私の責任であると言っていました。

次の日に杭州の練習場に行ってきました。練習場は杭州の中心街からタクシーで50分程、非常に離れた周りに何も無いところにJヴィレッジのような環境があるといった様子です。ピッチが数えただけでも9面、しかもスタンドやメインのコートには照明がきちんと整備されていて、ユース、ジュニアユース年代の寮、食堂、学校も併設されていました。だいたい400人くらいかでここで生活し学んでいるそうです。先程も言いましたが、多くの中国スーパーリーグ

のチームが豊富な資金力を武器に監督そして選手を獲得し、手っ取り早くクラブを強化するのに対し、杭州そして山東省のチームこの2つだけが育成に力を入れています。杭州のオーナー孫さんも日本のサッカーが好きだとおっしゃられ、我々は他のクラブと違い、地域に根ざした100年続くクラブを作りたいとおっしゃっていました。これはJリーグの受け売りだと思いますか、中国では珍しい考え方です。浙江省は元々サッカー不毛の土地だと言われていたそうなのですが、そこにこういったサッカークラブが出来、地元に応援してもらい、いずれは地元の優秀な子供たちがこのトップチームで活躍をするようなシステムを作っていきたいと語っていました。当たり前のことのように聞こえますが、これは中国では画期的なことです。その為には、育成が分かっている指導者が必要なので岡田さんと呼んだということです。

現状は岡田監督とは1年契約ですが、最低でも3年はやってほしい、トップチームだけではなく育成のシステムまで見てほしいと言っていました。こちらは寮です。中を見ることはできませんでしたが、4階建ての建物で2人ずつぐらいが一緒に生活しているのでしょうか。ちなみに绿城グループは言ってみれば不動産デベロッパーで、中国スーパーリーグ16チームのうち14チームが不動産系の企業が所有しており、別名不動産リーグと呼ばれています。つまり不動産にお金が回っているからこれだけ融資ができるわけで、まさにバブルであると言えます。なぜサッカーに融資するかというと、まず宣伝ですね。チーム名に地名+企業ですので、ACLに出場でもしようものなら、自分の企業名がアジアレベルで知れ渡るわけです。それに政治的な背景もあると言われていています。次の中国の指導者である、習近平は自分でもプレーしていたサッカー好きで、サッカーをやっているということで、指導者側からの印象が良くなることも、実は狙っているのではないかとされていました。

次は上海です。ここでグラスルーツの話をしたいと思います。これは指導者が子供にサッカーを教えている風景なのですか、指導しているのは日本の企業です。日本のリーフラスという企業が現地法人を作り日本人と現地のスタッフが運営しているサッカー教室で、現在500名程の子供を教えているそうです。何故日本の企業がサッカーを教えているかということ、これは根深い話になるのですが、中国では子供たちにちゃんとスポーツを教えるシステムが上海ですらほとんどない。では子供たちが何をしているかということ、習い事がやたらと多く、学校から帰ってくると英会話、水泳、ピアノ等たくさん掛け持ちをしていて、小学1年生でも夜10時まで勉強をしているそうです。先ほどの一人っ子政策に関係してくるのですが、中国では子供に過剰な教育投資をする傾向が強く、将来は医者か、弁護士あるいは政府関係者、企業の経営者になってほしいと全ての親が願っていますので、尋常でない教育へのお金の掛け方がされます。その一方で、体を動かすということに親も学校も無頓着で、体育の授業もまともになされておらず、子供たちを運動場で適当に走らすとか、受験に有利なように体育の時間に算数の授業す

る、といったこともあるようです。もちろんスポーツをしている子供達もいますが、彼らはオリンピックのために養成されているスポーツエリートです。エリートだけがスポーツをし、普通に子供たちがプロになるわけではないけれども、体を動かしたりボールで遊んだりするような、カジュアルなスポーツを行うシステムが全くないので、日本の企業が進出してサッカーを教えるというビジネスが成り立ってしまうわけです。上海は今日本人が世界で1番多く住んでいる街ですから、当初彼らは日本人向けのサッカースクールを展開していたようですが、その後独立して地元の子供向けのスクールを立ち上げましたが、なかなか親の理解が得られなかったそうです。先程言ったようにサッカーには非常にダークなイメージが付きまわっていて、なおかつ子供をサッカー選手にさせないのに、なぜサッカーをさせる必要があるのだという親に、スタッフが学校の前で一生懸命ビラを配り、僕たちはただサッカーを教えるのではありません。将来役に立つ協調性や、努力をすることといった人間形成のためにサッカーを使っているのであって、それは必ず子供のためになるという説得の仕方をしたそうです。先日チームをたくさん作り大会を行ったそうですか、こんなに楽しそうにボールを追いかけている子供を初めて見たと親が口々に言っていたそうです。つまり、子供が一生懸命に遊んでいるところを親も見えていないということで、何だかすごい話だと感じました。実際に子供たちを見ていると、ボールタッチは日本の子供たちのほうが圧倒的にうまいですし、ボディーバランスもぎこちなく、いかに普段体を使っていないかというのが、私が見てもありありと分かりました。指導者の方が面白いことを言っていたのが、ビブスやコーンを見ると子供たちが異常に興奮するとのことでした。普段あんなカラフルな物を目にしないので、それで遊んでしまうそうです。日本の指導風景ですと、コーチの話をみんながちゃんと集中して聞いていると思うのですが、中国の子供やはり集中が足りないようで、教育の仕方が日本とは違うということは思いますが、同じ東アジアで全然違うのだと思いました。

これが上海申花のスタジアム、上海虹口足球场です。中国のスタジアムにはサッカー専用はあまりありませんが、立派ですし駅のすぐ側にあってアクセスも良いですし、雰囲気も良いと私は感じているのですが、最大の問題はスタジアムグルメがないことと、マスコットがないことです。グルメに関しては、怪しげな業者がやっているだけでビールを飲ませるといったところを見ることはありませんでした。なぜ、こういったところにお金が落ちるシステムを開発しないのか不思議に思いました。

こちらは上海申花のサポーターですが、青白赤のトリコロールがどことなくマリノスをイメージさせますが、歌っている歌はそのまま名古屋グラウンパスの真似でした。おそらく Youtube 等で視聴して、そのまま持ってきているのでしょうが J リーグの文化が中国にも反映していることが非常に興味深かったです。これはアネルカですが、実はこの時上海申花は大きな問題を抱えていました。新聞によるとティガナは解任され、指揮はアネルカが執るだろうと報道され

ていました。ところがメンバー表が配られると、ティガナの名前がありサインもされていました。ティガナが現れるのか注目していましたが、結局現れることはなく、さりとてアネルカがプレーイングマネージャーをしている様子もなかったので、このチームは一体どうなっているのだろうかと思議でした。この日の相手は天津でしたが、上海はホームゲームであるにもかかわらず1対0で負けていました。ちなみに天津の監督はガンバ大阪等で指揮をとっていたヨジップ・クジェでした。こちらは敗れて呆然とする上海サポーターです。タバコを吸っている人は多くいました。驚いたのはゴール裏でカメラを構えている人がタバコを知っていたことです。ちょっと前まではロシアやセルビアはタバコに寛容でしたが、最近ではヨーロッパではそのような光景は見なくなりましたが、中国ではまだ平気でタバコが吸えます。このあとの会見も凄く変な会見でして、ティガナが来なかったのでアネルカが会見をするのかと思ったら一人の中国人が座り、通訳にあれは誰なのかを聞いたところ、日本にはないポジションだろうけどチームの副団長とのことでした。監督はなぜ来なかったのか、という質問に対してティガナ監督はこれまでの敗戦を分析するレポートを書いて今日は来られなかったと、よく分からない答えを返していました。会見後にメンバー表を見返したところ、通訳が「これはティガナのサインじゃないですよ、ここには代理と書いてあります」と教えてくれました。あわてて先日の杭州戦のメンバー表を取り出すと、そこには全く別人のサインが書いてあった。後で分かったことですかティガナはスタジアムに来ようとしたのですが、バスに乗り込む際に選手たちに、監督がバスに乗るならば私たちは試合に出ません、と非常に険悪な雰囲気になり、ティガナは仕方がなくタクシーでスタジアムに向かってそうです。そしてスタジアムに着くと今度はチームのスタッフが、あなたが来ると選手が動揺するから選手達と会わないでくれ、スタジアムで観戦してくれと言われ、ティガナは怒って帰宅したそうです。まずティガナとアネルカは険悪な関係だったようで、アネルカが先に選手全員を掌握してしまい、結果ティガナは中国に来てすぐに結果が出るはずもないのにそのまま解任されてしまいました。その後アネルカが監督になるのかと思っていたら、アルゼンチンの監督をしていたバティスタが就任と、とにかく行き当たりばったりのことをやっているのが上海申花というチームです。ドログバが行く時も一体大丈夫なのだろうか、半ばあきれながらも楽しみに見えています。

次の日に上海申花の練習場に行ってきました。ここもすごく大きくてコートは10面ありました。中国は面白いシステムがあり、トップチームの次の日の午前中にサテライトの試合があります。先日試合に出られなかった若手選手を中心に同じチーム同士で試合を行い、この日も上海と天津のサテライトの試合が開催されていました。そこにはアネルカがちゃんと視察に来ていました。アネルカの新しいコーチが2人来ていて、奥にいるのは元イングランド代表の第3ゴールキーパーのウォーカーで、アネルカの参謀役になったようです。この時にはアネルカが監督をやる気があるのかと見ていたのですが、結果的にはバティスタが就任しました。ちなみに

にアネルカは週給 2,500 万円をもらっているそうです。

最後に広州に行きました。広州は、今 ACL に出場している広州恒大と広州富力の 2 つのチームが本拠地としています。この日は広州富力の試合をあえてチケットを買って観客席で見ました。チケットは日本円で 500 円くらいですかね。このスタジアムは変わっていて入り口が一つか二つしかありません。そこから手前の道をぐるっと回ってメインスタンドへ行くという、何故こんな作りにしたのだらうと思うような構造でした。

牛 木：斜面を利用したスタジアムですか？

宇都宮：そうですね、かなり急勾配のところにはスタジアムはありました。

牛 木：なんというところですか、昔は越秀山というスタジアムがありましたか？

宇都宮：そうです。ここは越秀山です。いらしたことがありますか？

牛 木：ええ、スタジアムは新しくなっていますが、地形が似ていたからわかりました。

宇都宮：越秀山体育场という名前で収容数は 35,000 人。ちなみに広州サッカー協会もこの中にあります。スタジアムの中をぐるっと回るのでゴール裏のサポーター席も見えますが、かなりたくさんサポーターがいるのが分かります。この広州富力はこの時首位を走っていました。不思議に思ったのは、今シーズン 2 部から昇格してきたこのチームに、これだけ多くのサポーターがいるのはおかしいのではないかということです。しかも広州富力はもともと朝鮮半島の近くにある瀋陽のチームで、その後長沙、深圳とオーナーが変わるたびに移転して、半年前に広州のクラブになったそうで、これだけ歴史がないのに多くのサポーターがいるのはおかしい、おそらくサポーターのほとんどは雇われサポーターではないかと私は思います。といいますのも、広州恒大にもいるようですが、アウェイの ACL でも旅費と交通費をクラブ側が出してツアーを組ませて応援に行かせているそうです。それほどお金を持っているということです。私が座ったのはメインスタンドで座席椅子がない、コンクリートにそのまま新聞紙を敷いて見るような感じでしたが、サッカー専用スタジアムだったので非常に観戦しやすかったです。相手は大連でした。大連は北のサッカー処で広州は南のサッカー処という対戦カードでした。中国の南に行くとサッカーが盛んでして、自分たちのチャンスになると老いも若きも身を乗り出して観戦していましたが、個人的に面白かったのはブーイングが、「ブー」ではなく「えー」だったことです。味方の選手にイエローカードが出ると一斉に「えー」となり妙に可愛らしかったです。

広州での取材のメインは ACL でした。この時は広州恒大対柏レイソルの試合がありました。

ACL はやはり人気があり、後ろに広州恒大のオフィシャルショップ見えますが、一番高いチケットは 550 元、当時のレートで約 7,700 円となります。初任給が大体 3,000 元ということだったので、その 6 分の 1 は結構な値段ですよ。それでも飛ぶように売れてしまいます。安いところで 100 元くらいでした。広州恒大のホームスタジアムは 2010 年のアジア大会のメイン会場になった、天河体育中心体育場で、収容人数は 58,500 人と大規模なスタジアムです。ちなみに広州恒大のチームカラーは赤です。スタジアム内の風景はこのように赤一色で、浦和レッズと見間違えそうなほどです。この試合に関しては、人気のある ACL ということと、広州恒大が強いチームであるということとこれだけの観客が集まったのだと思います。ACL のグループリーグでこれだけ人が入るということに私はびっくりしました。私は見る事が出来なかったのですが、ハーフタイムには“尖閣は我々の物“という横断幕が掲げられていたそうです。これは広州恒大のゲームメーカーで、この人がいないとチームがまわって行かないと言われる程の中心選手ダリオ・コンカです。アルゼンチン人で代表経験はありませんが、フルミネンセやヴァスコ・ダ・ガマといったブラジルのチームで有名になり中国に渡った選手です。現在、彼が幾らもらっていると思いますか？たしかこの時で 11 億円と言っていました。これはイブラヒモビッチやカカよりも高い金額になります。それくらいポンと出してしまうこのチームもすごいですが、このオーナーは広州恒大不動産の許家印（シージャンイー）という人で、中国のアブラモビッチと言っている程サッカーにお金をかける人で、例えば ACL の初戦で全北現代と対戦し 5 対 1 で勝っているのですが、この時は勝利給の 600 万元 + 1 得失点につき 200 万元を出すという大盤振る舞いをして、結果 1,400 万元、およそ 2 億円をチームに支給したそうです。中国のスポーツ新聞には順位表の横にもう一つ表があり、それは勝利給ランキングで必ずペアで載っているそうです。トップは広州恒大、2 位は広州富力で岡田さんが指揮する杭州绿城はたしか 15 位で下から 2 番目でした。だいたい勝利給と順位は比例しています。結局この試合は 3 対 1 でレイソルがなす術もなく敗れてしまいました。この試合見られましたか？

参加者：決勝トーナメントの試合は観戦しました。

宇都宮：どうでしたか、雰囲気は？ 凄かったですよ。

参加者：北京と違ってすぐ側に相手サポーターがいたので、威圧感はありました。ただ女性のサポーターもちらほらいたので、その点では緩い空気もありました。

宇都宮：広州恒大はこの試合で決勝トーナメント進出がほぼ確定し、翌日のメディアにも大きく報道されていました。広州恒大が 3 対 1 で日本の J クラブを破ったことには、中国サッカー界にとって非常に大きな意味があります。中国サッカー協会が日本に学ぶ姿勢を出し、杭州绿城のように日

本式の育成システムを構築しようとするチームがある一方で、広州恒大のように大金を出して選手を獲得したチームが日本式サッカーを全否定するような勝ち方をし、この後 FC 東京にも勝利しています。やっぱり育成なんかは金を回すよりも、海外から優秀な選手を取ってきてすぐに強化したほうが効率的だ、という風潮になるかもしれません。おそらくこのチームは ACL でいいところまで勝ち進み、ひょっとすると優勝するかもしれません。こうなったときに中国サッカー界はこれをどう評価するかですね。日本に学ぶ姿勢をとるのか、それとも即効性のある方法にお金を投じて行くのか。中国サッカーは大きな岐路に立っているのではないかとこの試合を強く感じました。私からのプレゼンテーションは以上です。

第Ⅱ部 ディスカッション

中 塚：それでは10分程、質問なり補足なりフリーで話をしましょう。

宇都宮：牛木さんにお聞きしたいのですが、60年代、70年代、80年代の中国をご覧になってきた方からして、これほど今潤沢な資金がある中国のサッカー界をどうご覧になりますか？

牛 木：これはまるで違いますね。超級に関しては完全なバブルで、いつ、はじけてもおかしくない。アメリカでも日本でも不動産のバブルがはじけて不景気が来た歴史があるので、中国でのバブルが何時終わりを迎えてもおかしくはない。そのときに超級リーグが持ちこたえられるのか、ということですね。なにしろ国が広いのでこの国で全国リーグを実施しようというのに相当無理がありますよね。しかしながら、興味深く聞いていました。越秀山や北京の工人体育館といった競技場は新しくなっていますが、我々が交流していたときに使用されていた場所でした。

宇都宮：心ある中国サッカー関係者は、いつかはこのバブルがはじけ中国サッカーはどん底に陥ると戦々恐々としています。おそらくオーナーはバブルがはじければ飛び出せばいいや、というくらいのもので感じだと思います。ですので、本当にバブルが終わりを迎え有名選手がいなくなり、あるいはクラブが身売りなんてことになった場合に、果たしてどれだけのサポーターは残っているか、どれだけその土地にサッカー文化が残っているかということが試されるのだと思います。

参加者：中国ではサッカーが一番人気だと聞いているのですが、やはりそうなのでしょうか？

宇都宮：現地のスポーツ新聞を見るとサッカーとバスケットボールが人気を二分している感じです。サッカーに関してはプレミアリーグの情報が多く載っていました。そのあとはやはり卓球ですかね。バスケは人気がありましたね。

参加者：バスケにもプロリーグがあるのでしょうか？

宇都宮：ありました。

中 塚：超級リーグの仕組みですが、やはり1部に16チームあるわけですね。その下はどうなっているのでしょうか。昔は甲と乙があったと記憶していますが。

宇都宮：超と甲と乙ですね。

参加者：甲までがプロ、いや乙までかな？ 丙以下はアマチュアとなっています。

宇都宮：トップリーグも 2004 年までは 12 チーム、2005 年には 14 チーム、2006 年には 16 チームになって、今度また増やすという話もありますのでおそらく 18 チーム位までは増えるのではないでしょうか。

笹原：北京は八喜というアイスクリーム会社のチームが乙に入っていました。私たちがサッカーをしている隣のグラウンドでプレーをしていたりします。先ほどの上海申花のグラウンドは J アジアカップで使用したグラウンドです。

宇都宮：先ほど言い忘れましたが、上海申花の練習施設は、実は育成施設で寮や学校があったのですが、ある時期から子供が集まらなくなった。そして学費を上げたらさらに集まらなくなって、全て閉めてしまったそうです。それまでは上海申花は割と育成に力を入れていたのですが、その時期から思いっきり舵を切って、育成は採算に合わないのでアネルカを買おう、ドログバを買おうになってしまったわけです。上海申花も最初から今のような強化方針ではありませんでした。どこかから方向を誤ってしまったわけです。ちなみに上海申花は不動産ではなくネットゲームの会社がオーナーです。

参加者：身売りの話ですが、広州富力ですが、もともと瀋陽にあったチームを広州の富力という会社が買ったのですか？

宇都宮：オーナーが変わったようです。アメリカも同様ですが、チームが物のように売り買いされています。その際、地元サポーターのことなど全く考えないで、いきなり遠くの場所にチームが移転するというのが、往々にしてあるそうです。

参加者：横浜 FC が香港のチームを買いましたよね。

宇都宮：あれは元々何のチームなのでしょう？

参加者：元々香港リーグのチームです。

宇都宮：なるほど

参加者：中国のサッカー協会にも行かれたということですが、日本だと往年の名選手がいろいろな役職に就くことがあるのですが、中国はどうかのでしょうか。八百長事件の影響でいろいろと変わっているかもしれませんが。

宇都宮：そういう話は聞かないですね。これまでは全然畑違いのところから人を引っ張ってきたようで、名選手だから 会長、副会長になるということではないようですね。先ほどの林さんもサッカーは全然関わっていなかったと言っていました。

参加者：どこから来たのですか？

宇都宮：オリンピックの組織だったようです。

牛 木：1960～80年代の中国のスポーツ組織は、政府機関としては国家体育運動委員会そして民間団体としては中華全国体育総会というのがあり、競技団体は中華全国体育総会に属しているわけですが、実は上の方では本当は一つで、トップを押さえているのは共産党上がりというか共産党員で、林さんの上にいるあまり出て来ない主席はおそらく共産党の幹部で、そこから来ている人間ではないかと思います。林さんたちのクラスは高級官僚のクラスであると思います。

宇都宮：結局は官僚なのでしょうね。

牛 木：私が習志野のサッカーの交流で中国に行った時に、団長の通訳の他に、私についた通訳は英語が話せて、日本語を勉強しているから困ったときは英語で話しましょうと言ってきました。後に彼はI O C委員になりました。共産党と一体の官僚組織があって計画的に官僚の育成、党員の育成が行われている。それと超級リーグは相容れないものなので、中国のスポーツ界全体から見れば少し外れているのではないかと思います。そういったわけで、広州のプロチームがなくなったら、広州のサッカー文化がなくなるかというところではなく、広州のサッカー文化は別に存在しているのではないかと、今日話を聞いて感じました。

宇都宮：ちなみに中国にはJリーグのような組織はありません。中国サッカー協会がリーグを仕切っています。取材申請は中国サッカー協会にしなければなりません。上海や広州に取材に行った場合は、試合は上海サッカー協会、ないし広州サッカー協会の主管で、それぞれのスタッフが会見や運営を仕切っていました。ですので、協会の思惑の中でリーグが運営されているということが取材申請をして初めて分かりました。

参加者：広州は2つチームがあるのでそういう場合はどうするのでしょうかね？

宇都宮：それも、チームカラーが赤と青なので、マンチェスター・ユナイテッドとシティーのような関係なのかと聞いたら、歴史がないのでそこまで行っていなく、お互い何とも思っていないと言っていました。あと、ただ券をやたらと配っていました、配っているというよりもただ券を売ろうとしている人がたくさんいました。ですので、相当撒いていたと思います。

参加者：宇都宮さんが買ったチケットはどのようなものだったのですか？

宇都宮：メインスタンドでしたので、一番良い席になります。それが日本円で 500 円くらいでした。チケットもブースがあるわけでもなく、普通に机を並べて売っていました。

牛 木：カメラの持ち込みにチェックはないのですか。

宇都宮：問題ありませんでした。

参加者：安い入場券は幾らぐらいなのでしょうかね？

宇都宮：幾らくらいなのでしょうかね。おそらく 200 円くらいで買えるのではないのでしょうか。ACL のチケットが非常に高価なのです。

中 塚：聞けば聞く程、疑問が浮かぶ中国サッカーですが（笑）、この続きは場所を変えて、中華料理でも食べながら話そうと思います。最後に牛木さんと宇都宮さんから一言お願いしたいのですが。

牛 木：私の生きてきた時代と宇都宮さんが生きていた時代が違いすぎるので、理解に苦しまれたかと思いますが、参考にしてください。

宇都宮：今日は牛木さんに前段で話していただいたお陰で、私も理解が深まりましたし、一筋縄では行かない国だと思ったと同時に、もう少し時間をかけて見て行かなくてはならないリーグ、世界だと感じていますので、また向こうに行くことがあるかもしれませんのでその時にはまた協力なりアドバイスを頂けたらと思っています。今日はありがとうございました。

続きは「ルン」で…